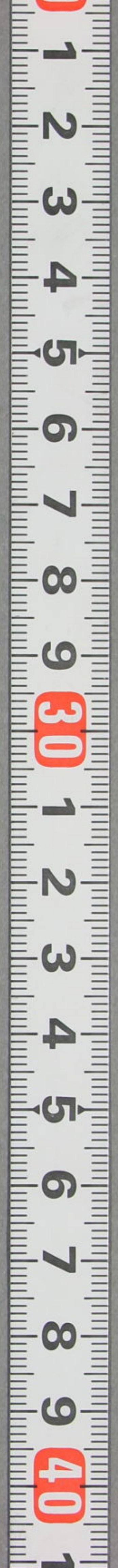


~ 13
 3706
 7

四編上

舞
 舞
 舞
 舞



門へ13
號3706
卷

薄倂

よがら

五小作

り花

國の巻

上の

おまを棒



一

支考の十論しこうのじゅうろん文章と評ひょうし。譬たと言ひの艶えん唇しんの千束ちんそくあるも思おもひ
字じの外がいはからしき只ただ思おもひと許ゆるう。百ひゃく枚まい書しよくもあらうも人ひとの
心こころ一ひと毫ごう動うごくもたらなしと。浅あさ芽が宿やどふ立忍しのび雲井の余よ所よ思おもひ
是こゝ則すなはち文章ぶんしょうの介ま併ひ諧わいの句くも文章ぶんしょうも各おの鄙ひえ甚く拙きの
とくとくと知しる一部ぶの策さく子しとを評ひょうふ化のあやも見みるあも堪ぬのとの
浅あさ芽が宿やどふも住す狭さき机の下した筆ふでと立て雲井の余よ所よの看かん官くわん
想おもひもんのとの初はつめあん。

五二

赤の陽春

安政六繪

為永春水誌る

椿園書

日巳四



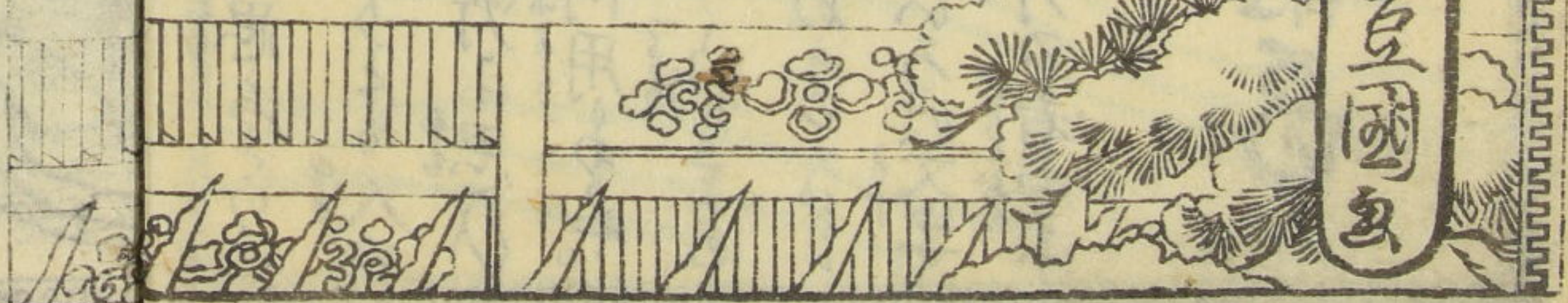
侍
粧
女



中泉家の内室
蜘蛛御前

邦竹の次女
黒姫

曲豆國





侍女
深見

菫
娘

菊川
小舟
太
真
住

曲
る
因
包

女
日
記
四



Handwritten text in a vertical column, likely a signature or title, written in black ink on aged, yellowish paper.